

# 自己顔の全体的な魅力に影響を及ぼす顔部位の検証

— 知覚像と記憶像の比較 —

○岩井安恵<sup>1</sup>・宮崎由樹<sup>1</sup>・河原純一郎<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>福山大学心理学科・<sup>2</sup>北海道大学文学研究院)

自分自身の顔の外見的な魅力に不満を持つ者は多い。中には、自己の顔に対する不満を過剰に捉えすぎて、日常生活を通常に送ることに支障をきたす者もいる(鍋田, 2011)。自分自身の顔の魅力に不満を持つ者の中には、想像上あるいは記憶上の自分自身の顔に対して不満を過剰に捉える場合もあれば、鏡を見ることを極端に避ける、鏡の前で髪型を整えること・化粧を施すのに異常に長く時間がかかるといった知覚上の欠点を過剰に捉える場合もある。

本研究の目的は、鏡で自己顔を知覚しながら顔全体の魅力評価を行う場合(鏡知覚条件)と記憶上の自己顔について魅力評価を行う場合(記憶条件)で手がかりとなる顔部位が異なるか調べることであった。両条件において、自己顔の全体的な魅力評価に寄与する顔部位を検証および比較した。

## 方法

**被験者** 大学生 69 名 (女性 46 名, 男性 23 名) が研究に参加した。

**手続き** 研究は 2 日に分けて実施した。1 日目と 2 日目は 1 週間以上の期間をあけた。各日「鏡知覚条件」あるいは「記憶条件」で被験者は評価を行った。鏡知覚条件では被験者は鏡で自分の顔を確認しながら評価した。記憶条件では自分の顔を思い出しながら評価した。両条件の順序は被験者間でカウンターバランスをとった。いずれの条件においても、被験者は自分自身の顔を見て、「顔全体」と「眉」「目」「髪型」「肌」「鼻」「頬」「口」「顎」の 8 つの顔部位について魅力度を 1 (魅力的ではない) から 100 (魅力的である) で自己評価した。9 つの評価対象の評定順序は被験者ごとにランダムとした。

## 結果

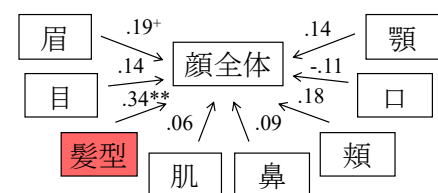
鏡知覚条件と記憶条件では顔の全体的な魅力評価に寄与する顔部位が全く違うことが示された。鏡知覚条件と記憶条件ごとに、独立変数を眉・目・髪型・肌・鼻・頬・口・顎・の 8 つの顔部位の魅力評価値, 従属変数を顔全体の魅力評価値として重回帰分析を行った (HAD16.0: 清水, 2016)。

その結果、鏡知覚条件では髪型の魅力評価 ( $p = .002, \beta = .340$ ) のみが顔全体の魅力評価に有意に影響することが明らかになった(Figure 1A)。一方で、記憶条件では目の魅力評価 ( $p = .021, \beta = .274$ ) と鼻の魅力評価 ( $p = .020, \beta = .347$ ) のみが顔全体の魅力評価に有意に影響することが示された (Figure 1B)。

## 考察

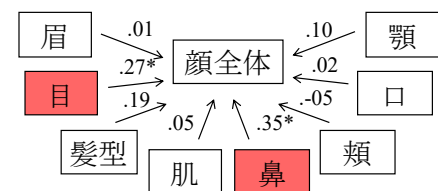
本研究の結果、鏡を使って自分自身の顔を直接知覚しながら顔全体を魅力評価する場合(鏡知覚条件)と、記憶上の自分自身の顔を想像しながら顔全体を魅力評価する場合(記憶条件)では、手がかりとする顔部位が異なっていた。具体的には、鏡知覚条件は髪型、記憶条件は目・鼻の魅力が重要な手がかりとなることが明らかになった。知覚条件で髪型の寄与が認められたのは、髪が他の部位に比べて相対的なサイズが大きいことに由来するのかもしれない。記憶条件で目・鼻の寄与が認められたのは、目・鼻は普段から視覚情報として目を引きやすい顔部位であり、自己像として鮮明に記憶されていることを示しているのかもしれない。今後、直接追試等を通じ、本研究の結果の頑健さを確認していきたい。

(A) 鏡知覚条件



$F(8, 60) = 10.10, p < .001, \text{adj. } R^2 = .517$

(B) 記憶条件



$F(8, 60) = 5.78, p < .001, \text{adj. } R^2 = .360$

Figure 1. 重回帰分析の結果 (\*\*は  $p < .01$ ; \*は  $p < .05$ ; +は  $p < .10$  を示す)。